

知的生産の技術としての装置作り (3)

三石博行 (金蘭短期大学生生活科学科助教 Ph.D.)

社会文化資源の分析方法(二)

現実世界の分析

免疫遺伝学的メタファー(たとえ話)とは

社会文化現象を解釈する装置を作るためには、その解釈理論が必要である。その解釈理論とは、これまで社会学や文化人類学の研究から作り出された理論である。前回は、そうした学説を課題にしたのではなく、社会文化現象のデザインが、物質エネルギーの世界と違い、文化記号によって描かれたデザインを持つっていると説明した。

しかも、「社会文化現象のデザイン」の中で、機械が文化的デザインを持つていることを説明するために、生物学的(免疫遺伝学的)メタファー(たとえ話)を使った。メタファーを用いた表現は、読者に分かりやすいように説明するための手段である。しかし、そのたとえ話が、あたかも理論と摺り替えられるような危険性がおこる。

メタファー的な考えを使って、新しい技術を実際に生み出すことができるとは限らない。その理論が、現実の問題を解決できない限り、正しい理論とは言えない。メタファー的な説明は、単なる解釈に過ぎない。

メタファーの説明は、理論的な構図を理解しやすいように、

それに類似した理論(前回では免疫遺伝学)でたとえただけであって、それ以上のものではない。前回述べた機械の改良を文化的遺伝子操作と言ったのは、改良とは、文化的な異物を排除するのでなく、その異物を社会身体(文化母体)の中に取り入れるために、社会文化の基本構造である文化の観念形態(イデオロギー)を変革する過程であると説明したのである。海外から来た考え方(科学)とやり方(技術)を、伝統的な考え方ややり方の中で再解釈し直し、文化的に納得いく考え方とやり方を見つけ出すことである。この自分なりの方法を見つける過程が、ちょうど、免疫反応に類似していると考えたのであった。

一九八〇年代は、分子免疫学が非常に進んだ時代だった。それらの新しい理論的展開に、当時、ポリテクニクのF.ヴァレサ教授の話を、所属していた大学院のセミナー(パリとアルザスの四つの大学で大学院の講座と研究会を作っていた)で、聞くことができた。また、免疫学を研究し始めたパートナーの話しも、毎日聞く事ができた。その影響か、免疫学の先端的な理論を耳学で入力していたように思う。

ルソーの社会体(Corps Social)を「社会身体」と解釈して、文化は身体的な機能を持っていると考えた。文化や社会の機能を、センサーなどの社会学が生物学(進化論)の影響を受けたように、免疫学的論理が当時のフランス社会学に影響を与えていた。その代表者はE.モランである。モランの著書を殆どと言うほど読みあさった。E.モランは七〇年代から分子免疫や遺伝学を中心であったカリフォルニア大学サンジエゴ校で研究した経緯や経験を、『カリフォルニア日記』の中で、書いている。

文化も身体と同じように免疫機能を持つ。異文化に対する文

化的な反応は、それを説明するための格好の材料である。異文化の要素を排除する作用は、伝統文化を守るための典型的な反応である。また、文化（社会身体）の活性化は、異物を取り入れながら、行われる。自分の組織を構築する情報や物質は、もともと他者であり環境であるという、ポスト構造主義とシステム論の融合が、試みられていた。

自己組織性のシステム論と免疫学的メタファーの起原は、系（文化）が開いた系であり、その系は他の系からの影響を常に受けていると考える。例えば、系は他の系からの情報（騒音）に影響されている。騒音は、系の中で情報に変換される。その変換を通じて、系は外部とのコミュニケーションの機能を獲得する。その上で系は安定する。ノーベル生理学賞を受けたH・アトランの生命系の自己組織性に関する理論が、この考えの背景にある。

異物（異文化）の自己化によって栄えた日本文化の歴史は、その中に自己認知を伴う構造を取り入れる過程がある。その過程を説明することで、改良や異文化理解の構造が解明できると考えた。しかし、その理解は、生物学的な身体ではない。仮に文化を社会身体と類似させて、免疫学の理論を、文化運動に当てはめたとしても、それは正しい人間社会学の理論的な構築ではない。それは、メタファー（たとえ話）にすぎない。

サルトルは、唯物史観や弁証法を、自然現象に当てはめて「自然の弁証法」と言ったエンゲルスを批判する。経済社会史の研究で理解し解釈した理論（唯物史観や弁証法）を、自然現象に当てはめる権利があるかどうかをサルトルは、エンゲルスに問いかけていた。それは一種のメタファーであると言いたいのだ

ろう。分野を超えて、理論を適用するためには、その理論の有効性を実証しなければならない。自然科学的な実証もなく、なぜ電子と核によって作られている原子が社会経済史の理論である「弁証法的」産物なのかと問いかけるのである。

同じことは、免疫学で解明された色々な生物的反応、異物に対する排除の反応（拒絶反応）や、もしくは異物を受け入れる反応（寛容反応）を、たとえそれに類似する文化現象があつたとしても、そのまま社会文化の現象に適用することはできないと指摘できる。

しかし、他方で、なぜ、メタファーが成立するのかという疑問が湧く。これは実に面白い疑問であるが、一応、たとえ話をそのまま科学的な理論であると思うことは慎むべきである。では、こんなにも似た現象を持っている文化と身体の間を説明する必要がある。しかし、そのことは、プログラムという概念が成立するまで、不可能であつた。

理論の成立に関するスタンスは、一般に、その理論的説明が有効であるかどうかである。その理論によって、社会文化問題の解決の技術が生み出されるかどうかという点検事項が、その理論の有効性を確認できる手段である。メタファー的な説明で、もし、有効な技術を開発することができるなら、そのメタファーは例えばなしの域をこえた知、つまり生産性を持った知性であると言える。その時、単なるメタファーから実践的な理論に変化したのである。

さて、メタファーから理論を形成して行く過程については、やはり、その理論を実証するための、または帰納的に理論を作り出すための、実験が必要であることを述べなければならない。

その類似した法則は、違う分野で行った実験結果をコピーしても、またそれを分析しても、新しい分野や自分のフィールドで適用する解釈や理論を作り出すことはできない。自分で実験を企画し、装置を作り、データを集める作業が必要になると思う。

世界のスタンダードとしての日本文化を考える

異物（外国の文化）を自分（自国の文化）に取り入れる作業は、日本のお家芸である。このお家芸のおかげで、今日の日本文化がある。よく考えると、日本の歴史が始まってから、稲作、文字、都市計画、宗教、法律、社会制度、武器（刀から鉄砲まで）、科学（天文学、数学からありとあらゆる学問まで）、周辺の国々、例えば朝鮮半島、中国大陸、ヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国から取り入れてきた。日本文化とは、つまり、海外の文化を消化してきた文化と言える。その消化力こそ日本文化の特徴であり、その消化能力こそ、日本が世界一として誇る事のできる文化なのかもしれない。

フランスのストラスブール第二大学（当時は人文科学大学と呼ばれていたが、現在は Marc Bloch（マーク・ブロク）大学と呼ばれている。しかもこの呼び方は友人のパイヨ氏が学長になってから始めたと聞いている）の哲学部の大学院の J. Toulmin（フランク・テンランド）教授のゼミで科学技術哲学を専攻していたころ、十数名の大学院生（フランス人は二名だけだった）の中で、よく皆の質問を受けた。アフリカから来た友人達が、私に非常な興味を感じていたのは、私が日本人であることだった。彼等の質問は、「何故、日本は近代化に成功したの

か」という内容のものだった。

インドのカルカッタ社会学研究所で、海外からの農業機械の導入によって生じている環境文化の問題について考えてきた経過もあり、ゼミの友人達の問題提起はよく理解できた。先進国に留学している発展途上国の若者達は、自国の経済や社会制度の発展を課題として研究に取り組んでいた。自分の出世と社会貢献が同次元に語られていた。哲学をするのも、自分達の国の教育や文化を高めるための思想や方法論をテーマにしていた。その彼等から、日本の近代化の過程を問われたのであった。

知は世界を変えるためにあるのだ。そのために知りたいのだという彼等の真剣な問い掛けに答えようとゼミの後も、彼等と一緒にいる大学寮に行って、夜遅くまで議論をした。議論をしているとゼミの学生だけでなく、社会学、経済学、法学、心理学、理工学や医学を専攻している発展途上国の研究者や学生も議論に参加するようになった。

近代化を進めるために、彼等は多くの疑問を抱えていた。例えば、ダムが出来たと思ったら、それが原因で環境破壊が進んだとモロッコから来た研究者はフランス政府の援助で作ったダムの話をしていた。もちろん、ダムをつくり、灌漑をして農業生産力を上げるために、環境を守りながらも、もっとよい方法はないかと言っていた。アルジェリアから来た研究者も、フランス植民地が終わった時代から政府が緑化運動で始めた針葉樹林（乾燥に強いのでヒマラヤ杉等を植える）の落葉で生じる土地の酸化問題を提起していた。さらに、ザイールから来た学生も、フランスなどの援助で、シャルルドゴールのような大きな空港を建設したが、利用度から考えても、大きな空港は必要な

かったと話していた。

近代化を進めたい。工業化を進めたい。この願いは大きい。悲惨な貧困に苦しむ国民を救うのは豊かな生産力を持つこと以外に道はないのだと考えていた。その彼等にしてみれば、日本が如何にして素早く西洋文化を取り入れることができたのかという理由を知りたかったのだ。

岸田秀の（フロイト派）精神文化分析との出会い

私は、そのころ、中央大学の鴫沢正道教授から頂いた和光大学教授岸田秀の著作『ものぐさ精神分析』の日本文化論に非常に興味を持っていた。岸田秀は日本文化を「精神分裂病」にたとえて文化分析を展開していた。近代化の過程で生じる自我の分裂、それを理解せずして、近代日本の歴史は語れない。岸田秀の展開は訝えていた。

例えば、役にも立たない刀を持って特攻機に乗る若者。あの刀は日本精神の象徴なのだろうか。その刀を持って近代兵器の先端技術を駆使して作られた航空機、零戦に乗って飛び立つのだ。この日本精神の象徴の刀と先端技術の航空機の二つの異なる文化の構造が、同時に存在しているのは、近代工業国日本の象徴的な姿を示している。

政治経済学的視点に立てば、現代の戦争が国家的な生産力を背景にした総力戦であり、先端技術の航空機の開発行為は分析可能であるが、日本刀を持って乗り込む姿は、その視点からは奇妙な行動、もしくは意味のない行為としてしか解釈されないだろう。

そこで、精神分析の視点から日本文化を分析して、岸田秀言う日本文化を「精神分裂病」と解釈すれば、この現象が理解されてくる。上からの近代化で進む近代文化と伝統文化の二重構造化、そして日本の社会文化の観念形態（自我）が二つの生活文化パラダイムに引き裂かれ、建物から洋服まで、音楽から遊び方まで、文化的な混乱が続くのである。

文化分析の視点に立てば、日本近代化の歴史過程で生じた社会文化現象や日本的と呼ばれる人間的行為等が理解できる。また、アメリカと無謀な戦争をほど、近代化で受けた日本人のこころの傷は深かったことも理解できるのである。

考えてみれば、浮世絵を包装紙にした時代、鹿鳴館を建てて、洋風の真似ごとをした時代、欧米文化、西欧の科学技術と取り入れ近代化を押し進め、工業国日本を目指した時代と、その反面、天皇制（中央集権国家を確立するために用いられた制度）のもとで、日本的な家や農村の文化が維持する時代とは、同時に進行しているのである。

近代化は伝統文化の存続を基本的に解体する革命運動の中で生じたのではなく、経済後進国日本が、欧米列強の植民地化を防ぐために、国家的な政策として進められたものである。しかも、近代化政策を推進する国家的な手段として天皇制まで用いたのである。日本の近代化政策は、国家の強烈な指導があつて急激に進むのである。優秀な官僚達の努力で、近代化は進むのである。しかし、その反面、日本の近代化の過程で、どれだけの犠牲が払われたか。

国家が指導する近代化政策は、世界中で色々な形を取ってきた。例えば、ロシアでのソビエト社会主義連邦や中国での中華

人民共和国の成立は、日本と同じように欧米列強に植民地化されないために、つまり帝国主義に市場開放を許し富みを収奪されないために、社会主義の名のもとに、国際経済関係を資本主義社会から閉ざして、近代化や工業化を進めたのである。それらの国も、社会主義のシステムでの近代化が進まないとなるや、こんどは社会主義を返上して、経済の発展のための戦略を立て直しているのがある。

国家が指導する近代化政策のもう一つのモデルは、日本、韓国、台湾などのように欧米の政治制度を取り入れて、国家が保護貿易をしながら近代化を進めた国々である。

近代化政策がもたらした文化的な課題を考えることが、異国の地で自分を見つめることと同次元の問題であった。発展途上国から来た友人達に、科学技術の進歩のよって発生している環境問題や公害を批判しても、貧しく食えない国民、文盲の多い社会、低い生産力の課題を突き付けられて、豊かな国の自分が貧困問題を解決しようとしている国々の友人達に対して答えを与えていないことは明らかだった。

だが、同時に、岸田秀の分析した文化問題が発展途上国の近代化の過程で発生することも、いや発生していることも、同じくらい深刻な課題だった。大学の授業で学ぶ経済学、社会学や哲学でこの問題の分析はできなかつた。しかし、ポスト構造主義の分析によって、唯一、岸田秀の文化精神分析の理論を展開できるのではと思えた。

当時の議論仲間に、岸田秀の日本文化の精神分析を紹介した。反響は大きかった。何故なら、彼等も同じように、近代化の過程の中で進行する精神分裂症状を感じていたからである。その

ことを展開する理論はなかつた。まるで、明治、大正の日本の知識人達が、伝統的文化と近代的文化の自我の統一を成し遂げるために苦悩している姿が、発展途上国の知識人の姿と重なり合った。

岸田秀教授はストラスブールへ一年間のサバチカル(海外研究)で来られた。弓削三男早稲田大学教授の紹介で岸田秀氏と会うことができた。忙しい岸田秀氏の著作研究活動の合間に割り込んで、文化分析のことを色々教えてもらった。岸田秀教授は、出身のルイ・パルツール大学(ストラスブール第一大学)心理学部の招待講演で、近代日本の文化分析について話された。大教室いっぱいの方が集まった。私の友人たちもみんな集まった。招待講演は大きな反響を残して終わった。

日本近代化の過程についての分析こそ、そのなかで生じた文化的問題の理解とその解決の理論こそ、今、発展途上国で必要とされている社会学理論の一つなのだ。日本近代化を考察することは近代化プロセスの世界的スタンダードを生み出すことなのだと思つた。ヨーロッパにフランスの哲学を学びに来て、その事を理解したのだった。欧米の人間社会学の理論を学びに来て、それらの理論を直輸入することがもつとも先進的な学問だと考えていた。その誤りが分かつたのだった。日本社会の近代化に関する分析やその理論化が、地球の人口の八割を超える人々に必要とされているではないかと思つた。

日本文化を分析する方法

あれは、一九八〇年だと記憶している。カルカタからリュックサックを背負って、イランのカスピ海やアラビア湾の農業地帯を見学に行ったとき、テヘランで数日間滞在した。たまたま、そこで友だちになったテヘラン大学の学生と、テヘランの町を楽しく見物していた。彼がつれて行った場所の一つにアメリカ文化センターがあった。しかし、まさか、そこを学生が占拠しているとは知らなかった。というのも、長い間インドにいたので、国際政治情勢のニュースをしつかりと把握していなかったのである。

マシンガンを右手に持った学生がいた。しかし、彼の手にはコカ・コーラが握られていた。そのコカ・コーラを飲みながら、彼は、アメリカ帝国主義打倒と叫んでいた。まさしく、これが近代化批判の自分達の姿だと思った。私はその学生に近づいて行って、「君は右手にマシンガンでアメリカに反抗しながら、左手にはコカ・コーラでアメリカを賛美しているではないか。」と言った。彼は、びっくりした顔をして私を見つめていた。それから彼と少し話をした。もう何を話したか忘れてしまったが、シャール時代の近代化政策に興味をもっていたので、その政策に対する彼等の意見を聞いたのだと思う。

彼等は、イランの近代化や工業化に反対しているのではなかった。むしろ、大いに賛成していた。国を先進国の餌食にすることに反対していた。石油を活用し、もつと、国を豊かにするために自立した経済政策を求めていた。

あの学生の姿、文化的に分裂した人々の光景は、きっと発展

途上国ではどこにでもある風景なのだろう。私も、同じような格好をして、日本で近代化批判をしてきた。しかし、マシンガンを右手に持った学生のイラン近代化批判は、イスラム原理主義者の反動的な近代化批判とはまったく違ったものであった。これらの学生達も、反動的なイスラム原理主義運動にからめ取られ、まったく思いもよらなかった中世的反近代化の方向に流され、最後はイラクとの戦争に駆り立てられて行ったのである。私を案内してくれた学生、左手にはコカ・コーラをもってアメリカを批判していた学生、イラクとの戦争に一兵卒として召集され、散って行ったかもしれない。その光景は、戦前の学徒出陣で散って行った日本の若者達の姿に重なるのである。

発展途上国の問題、それは近代化の過程をどのように作り出すかが大きな課題だと思う。その過程に失敗すると、その国が今後どのような方向に進むかを決定してしまう。例えば、今世界を騒がしているイスラム原理主義や国際テロ運動の原因も、もとを正せば、その国の近代化政策の失敗から生まれたものであると言える。

近代化は、一面、伝統文化を破壊するものであるが、その過程がなければ、工業社会も生産力の向上もありえない。この犠牲と引き換えに経済的な豊さを得るのである。それを成功した例と呼べば、戦後日本は、成功例の代表選手である。アメリカがサダム・フセイン以後のイラクを日本の戦後処理と同様にイメージするのは、アメリカにとって、戦後日本は、民主主義化に成功した最も優秀な国であるからだろう。

日本の近代化こそ、発展途上国の模範例であるとアメリカは理解している。これは、皮肉な話である。我々は、近代化の痛

みを知り、そして、その過程の必要さも知っている。それなのに、我々は、多くの人々が望む近代化の過程に必要な社会学的な理論を構築することを日本の社会学の課題とすることすらない。しかし、アメリカ政府は、最も正しく日本の近代化の意味を理解し、その近代化への変換過程を、イスラム原理主義や反米的な政策を進める発展途上国に対する国際戦略として用いようとしているのである。

現実から出発すること

色々迷ったあげく、学位論文は『フロイトのメタ心理学のシステム論的解釈』で落ち着いた。フロイトの原典やその解釈の論文を読み漁った。当時はフランスではラカン派やフロイト派の論争もあって、議論仲間を探すには苦労しなかった。論文を作成しながら、精神分析家や心理学者等々と話が弾んだ。

この理論は、科学哲学の理論構築の一貫であった。科学的認識の起原に理性の形成をおき、人類が理性を見つけ出す過程を、精神分析の理論にそくして解釈してみたかった。近代化に関する文化分析は、それからであった。

学位論文が終わってから、フロイトから日本を観るとどうなるのかと思考実験を試してみた。まず、フロイトの理論を日本文化分析に応用しなければならぬのだが、それにしても、どれほどフロイトもしくは精神分析を活用した認識論を理解しているのが問題になった。

そこで、第一番目の実験は、フロイトをフロイトの理論で分析してみるというものだった。すると、フロイトは十九世紀の

終わり頃、オーストリアで生まれたユダヤ人で、ウィーン大学医学部を卒業し、医学部の神経生理学教室の助手となり、フランスの精神医学に影響され等々、彼の生涯やその歴史的は時代背景が問題となる。フロイトをフロイトの理論で分析した書物も色々あった。それらは参考になった。

そこで、第二番目の実験に移った。それは、フロイトの理論で日本を観る方法論の問題であった。彼は、よく実験した。当時、彼は大学を辞めて、クリニックを開き、午前中は患者を診察して、午後はその実験データをまとめる、つまり精神分析の理論を書いていた。はじめは、ヒステリーの患者の治療、夢分析、それから、自分の夢分析の実験を続けていた。

私のフロイトの理解は、フロイト学者の論文を読んで、その解釈をする。最悪な研究方法である。つまり、自分で実験もしないで、人の論文を読んで、新しい論文を書くのである。実験もしないで理論を立てる恥ずかしい論文で学位を貰った事になる。こんなことでは、私はフロイトの精神もその精神分析の科学性も理解していることにならないのではないか感じた。フロイトの文献を読んでフロイト学者になることでは、本当にフロイトを理解できないのだと分かった。しかし、もうそのころに、フランスを発つ予定が決まっていた。

日本の文化をフロイト的に観ることは、岸田秀が試みたように、日本の現実の資料をもとにして始める事だろうと思った。が、しかし、その方法を見つけ出すことはできなかった。日本近代化を分析する有効な理論に関して、モランの新生物社会学（遺伝子免疫学モデル）や岸田流の精神文化分析学から、最近では、吉田民人の人工物プログラム科学の理論に至るまで、色々

な理論の可能性を模索している。

分析を進めるための、原則を示そうと思う。まず、現実の現象から分析するという作業が第一の原則である。人間社会の学に関する実験装置とは、それらの現象が余りにも複雑であるのに、人間社会の現実をフラスコに入れて反応させる事も、シャーレの中で培養することもできない。そこで、現にある事実を取り出す方法が必要となる。

現実から始めようと考えたとき、現実社会を自分の目で観察し、自分の目を作る文化と観察された文化の二つを分析できる方法を見つけ出すことだと考えた。一つの方法は、反省学と名づけた哲学であり、もう一つの方法は、現場で徹底的に現実の事象を採取する方法である。その方法は、現在フィールドワークと呼ばれる。しかし、私は、考現学という研究方法に魅力を感じた。今でも、今和次郎という人物、彼の研究の仕方や研究方法を知ったときの感動を忘れることができないのである。

考現学の分析方法

フィールドワーク

生活文化現象を観察する手段の一つに今和次郎が一九二五年に『日本風俗史講座』第十号で提案した考現学（モデルノロジオ）という方法論がある。フィールドワークが考現学の調査方法である。

フィールドワークは、現在の生活系科学、社会系科学、民族学や文化人類学等で一般的に使われる方法である。しかし、考

現学的なフィールドワークの方法は、文化人類学や民族学で行われている方法と違い観察者の生活の場に関する調査である。文化人類学や民族学で行われているフィールドワークは、多くの場合、近代化や資本主義社会化の進んでいない地域で行われる。調査する人は先進国の学者である。その地域に生活文化を研究する学問がないからと言うよりも、先進国の文化人類学や民族学は近代化が行われていない社会の調査をする学問として定義された。

考現学的フィールドワークの方法は、そのフィールドと同じ文化的な環境で生活している研究者が、フィールドワークを組むのである。今和次郎は、考現学を文化社会考現学と、文化人類学を未開社会考現学、と呼んでいる。この考現学の「現」は、時間的な意味、つまり考古学に対する「現」という意味ばかりでなく、空間的な意味での「現」であると、川添登は『今和次郎 その考現学』の中で、述べている。文化的に違う世界にわざわざ出かけるのではなく、「いま、現在」自分の生活している空間の風俗（生活文化）についての学が考現学である。

その点で、考現学的な研究での「採集」は、考古学、人類学や民族学よりも有利である。例えば、生活道具について調査する場合、遺跡からその時代の生活様式を推理し、または近代化されていない地域まで行って、そこで使われている道具や使い方を調査するよりも、自分の住んでいる町の団地一千世帯の台所にある道具を調べる方が、調査し易いし、また調査の最中に調査の方法や採集するデータの種類の検討することもできる。

考現学のフィールドワークは、まるで昆虫採集のように、生活素材や様式を集める。しかし、「考現学においては、研究対象

梅棹忠夫『考現学と世界史』

	配号	意味	実数	%
男	┌	散髪・和服・下駄	19	38
	└	散髪・和服・靴	10	20
	〰	散髪・洋服・靴	21	42

表1 (季刊『人類学』2-1, 1971 梅棹忠夫『考現学と世界史』(上)より)

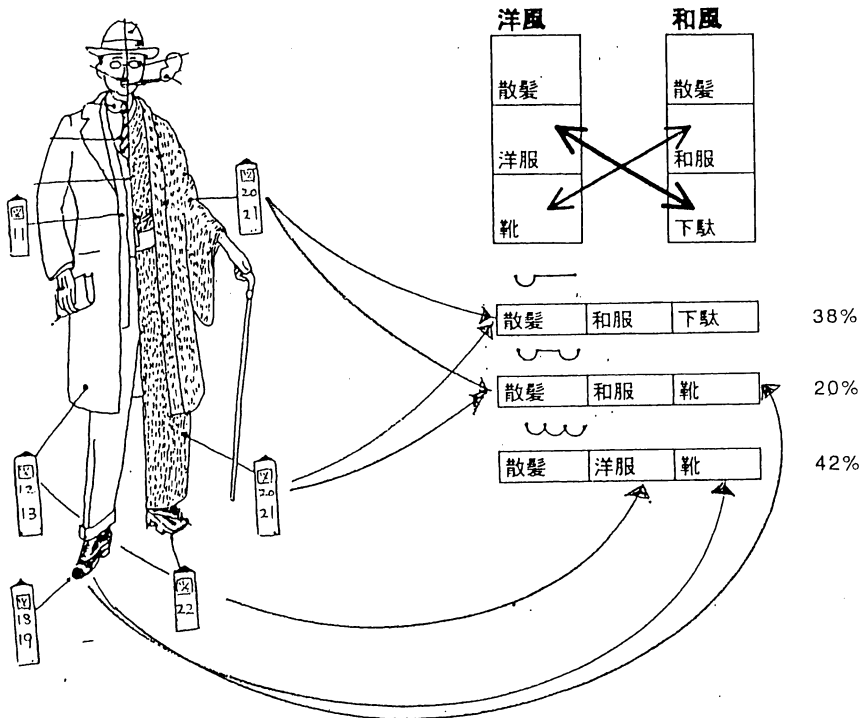
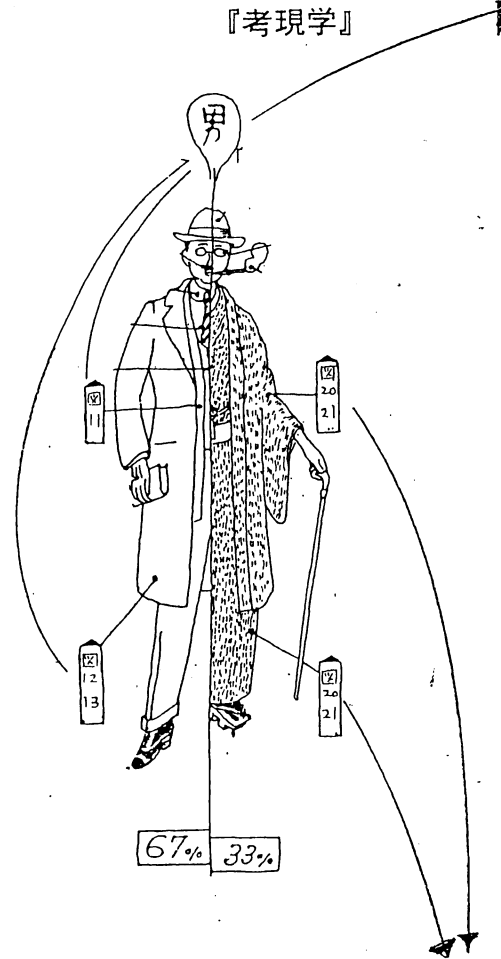


図10 統計図表索引

今和次郎『考現学』



16日午後5時55分~6時15分・西側南行

220人	霜降	黒	紺	縞	茶	タヌシ	縞系
	101	55	37	16	4	2	5

学生・労働者を除く ISIKAWA

図11 洋服の色

9日午後1時55分~2時12分・西側北行

129人	コート	レインコート	スプリングコート	その他
	17	7	25a	4
南	17	7	25a	4
北	31	22	32c	1c
		29	57	5
	48		81	
%	38		62	

スの中にオーバー 1. シマダの 1
aにヨシヤ 4
bに全 8
cに全 1

学生労働者を除く この日の天候に注意 (TUTIHASI)

図12 外套

11日午後2時10分~30分・西側北行 ISIKAWA

56人	茶	緑	青	カ	タ	ゴ	黒
	25	12	8	3	2	2	0

図13 外套の色

9日午後1時55分~2時12分・西側北行 KON

45人	縞	縞	縞	縞	縞	縞	縞	無地
	0	4	3	1	3	3	0	0
北	0	4	3	1	3	3	0	0
南	0	17	2	2	5	5	0	0
計	0	21	5	3	8	8	0	0

図20 男の着物

11日午後3時45分~4時5分・西側南行 羽子・俵友子

羽子	中柄	小柄	中柄	小柄	無地
200人	27	30	26	7	5
	13	13	32	10	4
%	16.7	40	43	58	17
		50	45	5	
羽子	17	28	30	10	20
	13	25	30	7	20
200人	30	53	60	17	40
%	42	38	20		

図21 男の着物と羽子の柄

と自分自身の生活舞台とは同一であり、そして自分自身の願望と研究対象者にそれとがつねに同席している関係にあることによつて、ちよつと他に類例をみない困難さ、あるいは困却さがわだかまつていることが注意を要することであるといえよう。

この点で人類学や民俗学における採集事とは違つた意味の困難さが伴う」と、今和次郎は述べている。言い換えると、「ミイラ取りがミイラに」ならないように、風俗事象を、敢えて昆虫採取のように、採集することが必要なのである。

昆虫採集のような自然科学の観察は、考現学の風俗調査法が昆虫採集のように風俗採集をしたとしても、その二つは基本的に違ふ。自然科学での観察は、例えば、植物の成長を観察するとか、動物の行動を観察するとか、または、顕微鏡を使って細胞を観察するとか、観察する人は、観察されている微生物や細菌の世界に入り込んで観察しているのでなく、微生物や細菌を観察対象として、外から観察しているのである。

その点では、考古学、人類学や民族学も、外から古代人や近代化される以前の人間を観察している。民族学のフィールドワークで、現代文明化されていない人々の生活の場に入り込み、そこに住み込んで、住民の生活文化を調査したとしても、観察者はその住民にはなれない。その限り、観察対象の外から観察できる立場を保つことができる。外から観察している限り、いわゆる客観的な態度が取れるのである。

自分の生活環境の風俗（生活様式）を調査するのは、昆虫採集のように行かない。この風俗（生活文化様式）と基本的に同じ意識構造を持った視点で、観察対象を観ていることになる。内から観ている考現学に、いわゆる自然科学のような客観的な

観測は期待出来ない。データ採集、収集、整理、統計的分析を提案する考現学であるが、同時に、研究対象と自分自身の生活舞台とは同一である事によつて生じている科学認識上の問題を考える必要がある。

生活文化素材収集と整理

さらに、生活文化や生活文化行動を構成している素材つまり家具、衣服、建物、髪型、履物等をもとにして生活文化様式を理解するのが、考現学の方法である。考古学は、遺跡や放射性同位元素の半減期をもとに過去の年代とその時代の人々の生活や社会について調査する。最近では、発掘された骨や髪の毛などから遺伝子を分析する方法まで用いられる。考現学とは、今和次郎によると、考古学と同じような物質的な根拠を示して、人の動き、住居、衣服等、風俗（生活文化のありさま）を考察する風俗（生活文化）についての学であると言っている。この場合、今和次郎の考現学の「現」の意味を時間的な「古」に対して使っている。考古学的方法で現在の風俗を調査するのである。生活文化素材（古代の遺跡であり、現代の服である）の分析方法を現在の風俗事象の調査法に応用したのである。

フィールドワークで、現場の生活素材を観察、筆記、スケッチ、写真等で、それらの素材の様子、形、デザイン、和風や洋風と言つたスタイルなどの材料を採集することから、生活様式の調査をはじめめる。その一つひとつは解釈可能な意味をもたないが、しかし、同類の、もしくは類似した材料が多く集まることによつて、「統計」的な意味を持つと、今和次郎は述べている。

採集の時間と場所は考現学にとっては意味を持っている。同じ素材も、それを採集した場所と時間に限定されている。その場所こそ生活空間つまりその生活様式が成立している環境条件を地理的に決定しているものである。また、時間こそ生活時間つまりその生活行動が多く発生する条件を時間的に決定しているものである。川添登は、考古学が遺跡（過去の生活素材）の研究で過去の生活全体を探究する方法を取ったのに対して、考現学は、生活素材そのものを研究するのではなく、その素材を通じて存在する風俗事象（生活文化様式）の研究であるために、それぞれの素材に対して生活が行われている場所と時間が限定されてくるのだと説明している。

現前の風俗に直接ぶつかるフィールドワークで観察、筆記、スケッチ、写真を撮る、などして採集した風俗事象は、「採集した場所あるいは場合と、他の場所あるいは場合における採集との比較調査の資料として貴重なのである」と今和次郎は述べている。この「採集」過程を調査の第一段階と考える。第二段階はこのデータを「収集」して、それらの事象を比較し、また相互関係を見つけ出す「統計」処理である。統計処理とは、一般的に、変数をなるべく少なくして、その質的データを量的データに変換して行うのであるが、今和次郎の統計は、場所、時間とある事象が独立変数となり、従属変数は事象を構成している要素となる。

例えば、観察者は和服スタイルと洋服スタイルの調査を企画したとする。十二月一日六時から十九時までの月日や時間帯、東京銀座（高級な店の並ぶ街）と本所深川（貧しい街）の二つの地点、服装のスタイルの三つが独立変数となる。そして和服

スタイルと洋服スタイルを構成している要素、例えば下駄履きか靴か、シャツか羽織か、袴かズボンか、等々が従属変数となる。通行人のひとりひとりがケースであり、そのケースは、(場所、時間、下駄、袴、シャツ、男、二十歳代、学生風、等々)の変数の集合となる。

実際の風俗事象は和服スタイルを構成する要素と洋服スタイルを構成する要素が組み合わされている。梅棹忠夫は、『人類学』に記載した論文「考現学と世界史」の中で、その状態を和服スタイル要素記号と洋服スタイル要素記号の構成によって出来ている記号として表現した。川添登によると、梅棹忠夫は、考現学の先駆者である坪井正五郎の「風俗測定」研究で示された「風俗符」の図やその「風俗符」をつかって数式的に表現することを試みた。

和風度と洋風度は、その二つの「風俗符」つまり記号要素の割合によって決定されている。図1に示すように、和風を直線形の符号で、また洋風を下半円の符号で表示した。記号要素の組み合わせで、和風度の高いものから低いものを作り出した。また、それらのスタイルが、実際の風俗事象として観察された件数や割合を図1に示す。例えば、十二月一日六時から十九時までの東京銀座と本所深川の風俗風景の動きが理解できるようになる。

さらに、実際の風俗事象では、和服スタイルと言っても、色々なスタイルがある。例えば、羽織や和服でも、形から柄まで、図2に示すように、今和次郎は、幾つかの種類に分類している。背広やコートでも同じである。例えば、十二月一日六時から十九時までの東京銀座と本所深川の通行人の服装を収集すると、

それらの二つの地域での生活風景が見えてくるのである。銀座では、和風スタイルよりも洋風スタイルが多く、しかも、スプリングコートの洋風スタイルが多い。銀座を歩く紳士達の洋風スタイルの風景が見えてくるのである。

統計的整理方法

今和次郎の提案する考現学での統計学は、風俗事象を構成する要素を従属変数とするため、その変数（調査項目）は非常に多くなる。例えば、服装（洋服か和服）と履物（靴か下駄）と考えると、服装という変数は（洋服と和服）の二つの選択項目の一方を取る。同じように履物も（靴か下駄）の二つの選択項目のどちらか一つを取ることになる。しかし、考現学の場合は、図2に示したように、例えばコートを一つ取っても、三種類に分類されている。その色も時間帯によって分類されている。同じように、和服の場合も、七種類に分類され、その柄も着物と羽織に分けて分類されている。

統計的処理をするためには、なるべくデータを多く取らなければならぬ、一般に、データが正規分布していると考えるのが、中心極限原理にしたがって、一つの項目が三十以上であることが望ましいと言われている。そのため、考現学の場合、非常に多くの採集が必要となる。

今和次郎の考現学での統計処理は、計量的に変数間の相関関係（調査項目の間で成り立っている関係）を計算するというのではなく、「統計」もしくは「集計」された場合の数を並べて、その比較をする。もちろん、それは立派な統計処理であるのだ

が、統計学者が気に掛けていることを十分に配慮したかどうかは疑わしい。

しかし、考現学は、この統計的な整理法を使って、みごとに風俗事象を分析していく。例えば、ドメス出版の今和次郎集一卷『考現学』に収録されている「早稲田学生の集散状態調査」で、七つの登校口で、図3に示すように、五分間ごとに入入りする学生の数を時間経過で示した。この調査方法は、現在でも、人の通行量に関する調査方法として使われている。

考現学における統計処理は、多様な風俗事象データの整理方法であり、その多様なデータの間にある関係を整理された表から理解するための手段であると感ずる。その意味で、統計作業は風俗事象の集計作業の道具である。しかも、風俗事象は場所と時間で変化する。時間は、一日の時間ばかりではない、一週間、一年という単位で、例えば銀座の風俗事象一つを取っても、人の歩き方、男女の比率、年齢層、服装や髪型まで変化している。そればかりではない、周期的な変化（可逆的な変化）と進化的な変化（非可逆的な変化）がある。流行や時代の流れで変わって行く服装、和風よりも洋風に変化していった服装の歴史なども、この風俗事象の統計的な整理で明らかになると思われる。

考現学的観察から文化記号や文化の文法の分析の試み

考現学的方法で用いられる風俗事象の採集方法、つまり現場の生活素材を観察、筆記、スケッチ、写真等、で集められたデータを統計処理しようとする、風俗事象を構成する莫大な変数

(調査項目)が生じる。そのため、すでに前節で指摘したように、統計的な処理は困難となる。

今和次郎の提案する考現学での統計学は、生活素材を具体的にスケッチで示し、それらの多様な生活素材パターンの事象件数を示している。その分析の方法は、すでに図2に示したように、風俗事象の整理方法であった。もちろん、図3に示したように、場所と時間での歩行者の数を統計的に分析した例もある。したがって、すべての考現学的調査データを統計処理することは困難であると言っているのではない。生活文化様式(風俗事象)を採集し、それを統計処理することは大変なことだと考えているのである。最近では情報処理機器の発達で、多量のデータを処理し、解析することが簡単になっていたので、データ処理計算上の問題は解決されるかもしれない。

ところで、今後、考現学の分析において、多くのデータが集まって、統計的信頼度も上がり、つまり中央極限原理を満たす状態になり、益々、統計的方法を用いたとする。しかし、風俗事象を計量的に分析することができるのだろうかという疑問が残る。言い換えると、考現学らしき、現場の生活素材を観察し、筆記し、スケッチし、写真で撮り集めたデータの持つ多様性を、すべて数的データに変換することが可能だろうか。その作業の中で、風俗事象の具体的な姿は消えて行くのではないかと感じる。考現学らしさを維持しながら、しかも、生活文化の構造を分析する方法はないのだろうか。

この疑問に答えるヒントは、考現学以前の考現学として梅棹忠夫が紹介した坪井正五郎の「風俗測定」と、その梅棹忠夫の解釈に隠れていると思った。梅棹忠夫が、『人類学』に記載した

論文「考現学と世界史」の中で、坪井正五郎の「風俗測定」は、和服スタイル要素記号と洋服スタイル要素記号の構成によって出来ていると解釈したことの意味を考えてみたい。
もともと、坪井正五郎は、「風俗符」を風俗観察のための簡便法、つまり測定記入を簡略にするための手段として開発した。

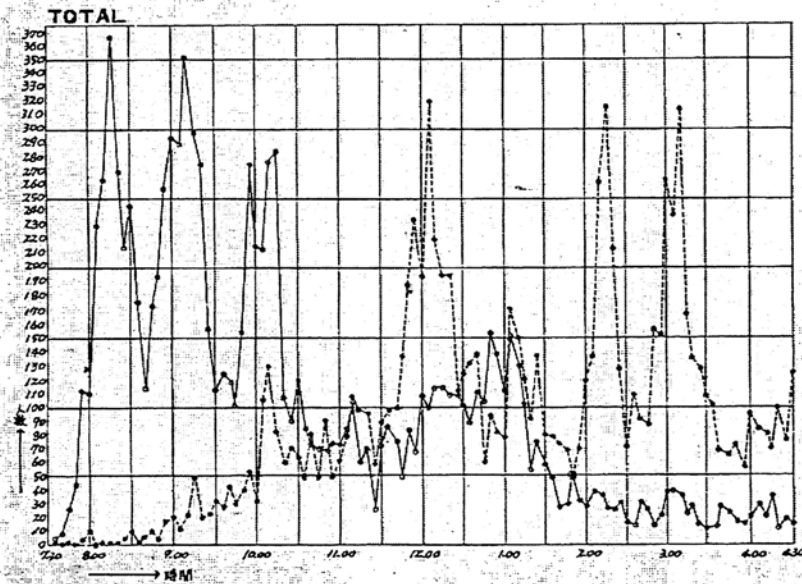


図225 学生の集散状態

今和次郎集一卷『考現学』ドメス出版 p327

図3

図 4、考現学と記号学

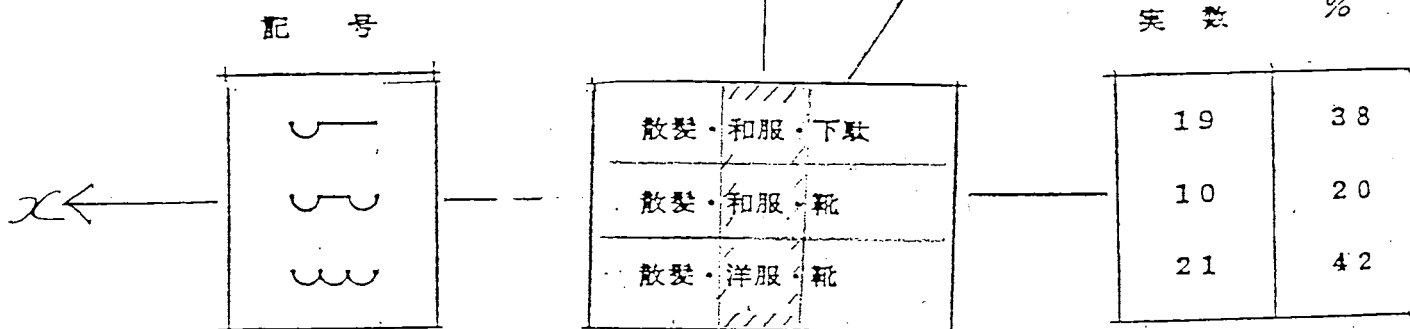
和服の種類に関する統計

9日午後1時55分-2時12分・西側北行 KON

45 人							
北 (尾張町)	0	4	3	1	3	3	0
南	0	17	2	2	5	5	0
計	0	21	5	3	8	8	0

組み合わせを記号化

組み合わせの場合を計量化



洋服の種類に関する統計

9日午後1時55分-2時12分・西側北行

129 人				
	コート	レ コ ート	ス プ リ ン グ コ ー ト	
南 あわり所	17	7	25 _a	4
北	31	22	32 _b	1 _c
		29	57	5
	48	81		
%	38	62		

洋風